

体育科・保健体育科

梅本 尚武・栗原 良典・植田 一矢

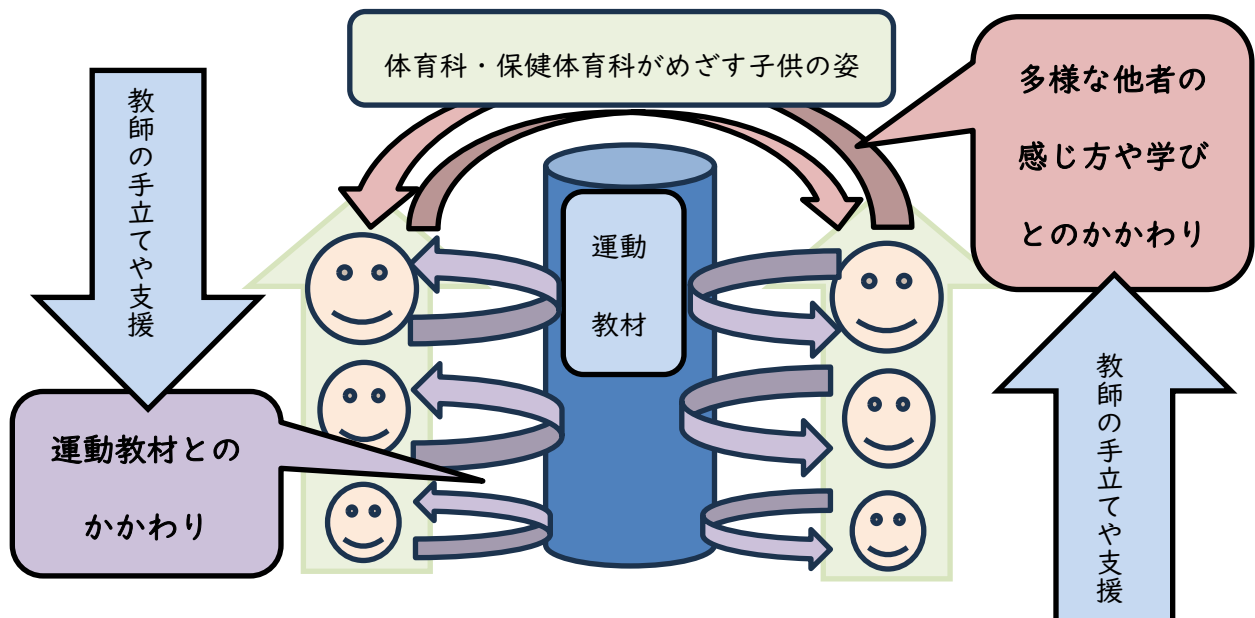
1 体育科・保健体育科の基本的な考え方

(1) これまでの経緯

本校では、令和元年度より、「教科等本来の魅力と学びのつながり」を中心に、児童・生徒に「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための学びを豊かにする授業を、小学校・中学校教員が協働して研究及び授業実践を行って深化させてきた。本校体育部としては、本校の目指す教育目標やこれまでの研究の経緯、児童・生徒が運動する意味や意義等を考慮し、体育科本来の魅力を『『こう動きたい』という自発的な運動衝動に突き動かされ、自らの身体や感覚と向き合いながら仲間とともに身体運動の課題を追求し、新たな諸能力を獲得すること』にあると定義した。そのような、体育科本来の魅力に迫る授業を実現していくために、体育科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力を明らかにしてきた。その中で、授業者は、学習者の運動経験や身体的条件が異なることや、運動に対する意欲についても差異のある状態である「多様性」を前提としておくこと。また、学習者同士が尊重し、共に高め合いながら「体育科本来の魅力に迫る授業」を作り上げていくことが重要であると考えてきた。

(2) 研究主題を踏まえた体育科での学び

本校の研究主題である「共に生きることを学ぶ教科等の授業づくりー自他を尊重し、共に高め合う子供の育成をめざしてー」に向けて、体育科の学びにおいては、多様な他者と意見を交わし、感じ方の違う他者を受け入れ、自らの運動感覚や学びに転換していくことで体育科を通して目指すべき児童・生徒の姿に近づいていくと考える。そのためには、どのような授業づくりや教師の手立てが必要となってくるのかを考えていきたい。体育科における児童・生徒の学び方は、第一段階として、運動教材とのかかわりの中で「～したい。」「どうすれば～できるか。」と自らの想いや意思をもとに、一人一人が主体的に分析しながら身体や感覚と向き合っていく。そして、第二段階では、多様な他者の感じ方や動きを自らの学びに取り入れたり、他者の学びに貢献したりしながら、運動と向き合い、深めていく学び方になると考える。これらの学び方の段階を考慮し、まずは第一段階に焦点を当てていく。運動教材とのかかわりの中で、一人一人の児童・生徒の想いや意思を引き出し、主体的に分析しながら身体や感覚と向き合っていくような授業づくりや、教師の手立てや支援の研究を行っていきたい。



体育科・保健体育科でめざす子供の姿	体育科・保健体育科の授業作りの特徴
<u>自らの運動を主体的に分析し、身体や感覚と向き合う</u> とともに、多様な他者と一緒にかかわり合いながら課題を追求し、新たな諸能力を獲得する姿。	・自発的な運動衝動を促す、出会わせ方と課題設定 ・自立的に学び育てることのできる振り返りの充実 ・客観的な分析を促す手立てと支援 ・運動を分析・表現し共有できる思考表現の確立

2 研究の目的

自らの運動を主体的に分析し、身体や感覚と向き合う児童・生徒を育成する体育科授業の在り方を明らかにすることを目的とする。

3 研究の方法

小学校・中学校体育科の各領域において、自らの運動を主体的に分析し、身体や感覚と向き合う児童・生徒の育成のための視点を踏まえた授業構想・実践を行う。授業実践後、児童・生徒の変容に基づいた分析・評価を通して、その授業の成果と自らの運動を主体的に分析し、身体や感覚と向き合っている姿に近づくための方策を検討する。

①知識・技能

- ・知識テストの単元前後の統計分析
- ・毎時間の自己評価（学習指導要領原文に基づく評価基準）
- ・実技テスト（V T R録画の分析）の単元前後の統計分析

②思考力・判断力・表現力等

- ・毎時間の自己評価・自由記述（学習指導要領原文に基づく評価基準）
- ・授業中の児童・生徒の会話や活動記録の分析
- ・パフォーマンス課題による評価

③学びに向かう力・人間性等

- ・運動への実態調査の単元前後の統計分析
- ・毎時間の自己評価・自由記述（学習指導要領原文に基づく評価基準）

④抽出児童・生徒に対する調査・分析

- ・単元前に実施する実態調査の結果から、児童・生徒を抽出対象児童・生徒とする。その児童・生徒の変化に着目し、今回の授業実践におけるデータを縦断的に蓄積し、その検証を行う。

⑤授業実践の映像記録分析

- ・児童の学習活動の様子と、それに繋がる教師行動の内容的分析（V T R録画の分析・検討）

【引用・参考文献】

文部科学省（2017），『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編』東山書房。
 文部科学省（2017），『小学校学習指導要領解説（平成29年告示） 体育編』東洋館出版社。
 国立教育政策研究所（2013），『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』
 日本教科教育学会（2015），『今なぜ、教科教育なのか－教科の本質を踏まえた授業づくり』文溪堂。
 中央教育審議会（2014），『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』
 中央教育審議会（2016），『次期学習指導要領にむけたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイント』

グリフィン, マクゴー, ケア (2014), 『21 世紀型スキルー学びと評価の新たな形ー』 北大路書房.

田村学 (2015), 『授業を磨く』 東洋館出版.

杉原隆 (2008), 『運動指導の心理学』 大修館書店.

マイネル (1981), 『スポーツ運動学』 大修館書店.

金子明友 (2005), 『身体知の形成』 明和出版.

金子明友 (2007), 『身体知の構造 構造分析論講義』 明和出版.

金子明友 (2007), 『スポーツ運動学 身体知の分析論』 明和出版.

佐野淳 (1990), 「運動の観察と分析」(金子明友・朝岡正雄編著『運動学講義』 大修館書店) .

三木四郎 (2005), 『新しい体育授業の運動学』 明和出版.

小林一久 (1985), 『体育の授業づくり論』 明治図書.

竹田清彦・高橋建夫・岡出美則(1997), 『体育科教育学の探求 体育授業づくりの基礎理論』 大修館書店.

高橋建夫 (2010), 『体育の授業を創る』 大修館書店.

岩田靖 (2012), 『体育の教材を創る――運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』 大修館書店.

日本体育科教育学会 (2021), 『体育科教育学研究ハンドブック』 大修館書店.